

# 日韓文化交流の重要性と自治体の役割

2015年、日本と韓国は国交正常化50周年という節目の年を迎える。近年、政治外交的課題を抱えた両国関係は厳しい局面を迎えているが、そのような中で、市民や地方自治体レベルでは永年さまざまな文化交流が続けられ、その結果、人的交流基盤が維持されている。特に2000年以降は、国レベルでの交流機運も高まり、民間レベルでの交流も拡大した。例えば、日韓国交正常化40周年を記念した「日韓友情年2005」のメイン行事の一つとして開催された「日韓交流おまつり」は今年で10回目を迎え、今や、日韓草の根交流の象徴的イベントに成長した。こうした文化交流の活性化とともに伝統文化・芸術面での交流が拡大・多面化し、地方都市から発信される特色ある文化交流においては自治体などの果たす役割も重要になっている。

今回の特集では、日韓交流の原動力の一つとも言える文化交流の重要性について、有識者から寄稿いただくとともに、それに関わる自治体などの取り組みについて紹介する。

## 1

### 静かに深まりを見せる日韓文化交流

独立行政法人国際交流基金ソウル日本文化センター所長 小島 寛之

#### 日韓パートナーシップ宣言以降の文化交流の広がり

日本と韓国の文化交流は、1998年に、当時の小淵首相と金大中大統領キムデジュンによって打ち出された「日韓パートナーシップ宣言」以降、量的にも質的にも大きく発展した。韓国では1998年から日本の大衆文化の段階的な開放が始まり、日本の映画や音楽が正規のルートで入るようになった。1999年に韓国で公開された岩井俊二監督の「ラブ・レター」は記録的なヒットとなり、劇中の日本語のせりふ、「お元気ですか」は流行語になった。その一方、日本では2003年頃から韓国ドラマ「冬のソナタ」のブームに端を発した「韓流」ブームに火が付く。日本と韓国の間の人々の行き来は、SARS、鳥インフルエンザや東日本大震災、為替変動などさまざまな出来事の影響を受けながらも、10年、15年のスパンの単位で見れば、右肩上がりに増加し、2013年には往来人数は500万人余りに達している。その間、両国政府は、パートナーシップ宣言の理念を

実現させるべく、2002年の日韓国民交流年とワールドカップ共催、2005年の日韓友情年、2008年の日韓観光交流年といった国レベルでの交流枠組みを作り、国際交流基金などの公的機関や自治体と連携しながら、交流の活性化に努めた。さらに、ワーキングホリデー制度や新しい航空路線の創設、ビザ発給制度の改定などが行われて、両国の交流拡大の制度的基盤が整い、それらの上に、民間ベースの文化コンテンツ流通の活発化や観光旅行客の増大などが相まって、両国の文化交流、人的交流は大きく飛躍した。

#### 多面的で単純には捉えられない 韓国人の日本イメージ

しかしながら、日韓パートナーシップ宣言から15年あまりが経過した今、さまざまな政治外交的課題に直面し、両国関係は難しい局面を迎えているように見える。2013年3月から4月に日本の言論NPOと韓国のシンクタンクEAI（東アジア研究院）が共同で実施した日韓世論調査によれば、韓

国に良い印象を持っている日本人は3割、日本に良い印象を持っている韓国人は1割にすぎない。韓国においては、実に8割近くが日本に対して良くない印象を持っていると回答している。また、最近、日本と韓国のマスメディアを見ると、相手国に対する批判的なニュースがほぼ毎日のように報道されているおり、これらを見ると、日本と韓国の心理的距離は年を経て縮まるどころか、より広がっているようにすら感じられる。

だが、調査実施時期は言論NPOのものより1年半ほどさかのぼるが、静岡県立大学グローバル・スタディーズ研究センターが行った別の調査結果を見ると、少し異なった様相が見えてくる。同センターは、2007年より日本政府が立ち上げた「21世紀東アジア青少年大交流計画」の一環として実施された、韓国の青少年の日本招へいプログラムの評価のため、プログラムに参加した若者とプログラムに参加しなかった若者の双方を対象に対日意識の調査を行った。ユニークな点は、本調査では好感度調査を実施するにあたり、質問項目を「日本」「日本人」「日本文化」の3つに分けたことである。プログラム参加者は、3つの項目それぞれについて7割～9割の高い好感度を示しているのに対し、プログラム非参加者（すなわち、無作為に選ばれた韓国の一般の若者たち）の「日本」「日本人」に対する好感度は、4割～5割という相対的に低い数値となっている。だが、プログラム非参加者も、「日本文化」に対しては7割近い人が好感を抱いていると回答している。さらに、「日本に対してさらに知りたい意向があるか」、「今後、日本を訪問する意向があるか」という2つの質問に対しては、プログラム非参加者の8割以上が肯定的な答えをしている。本調査結果からは、韓国の特に若い世代においては、日本イメージはより多面的、多重性を持つものになり、日本に対するネガティブな要素と同時に、日本文化に対する相対的に高い評価と関心が共存していることが推察される。

### 韓国で人気の高い日本の文化コンテンツ

韓国の若者にとって日本の文化コンテンツは身近なものであり、さまざまな外国文化の一つとし



最近実施された日本関連の展覧会や演劇公演

て、自然体で楽しむ対象になったと言えよう。政治外交問題の陰で見過ごされがちであるが、時を経て、両国の文化面での交流の厚みは増している。以下にいくつかの例を挙げてみよう。

○2013年には韓国で大型の日本美術展が相次いで開催された。国際交流基金がソウル大学美術館と共催で実施した、1970年代以降の40年間の日本の現代美術を回顧する大型美術展「Re: Quest」を皮切りに、村上隆展がサムスン美術館プラトード、草間彌生展が大邱美術館で、杉本博司展がサムスン美術館リウムでそれぞれ行われた。さらに、柳宗悦展やスタジオジブリの「レイアウト展」も行われ、まさに日本関連企画がめじろ押しであった。また、2014年には演劇分野で大型の公演が続く。3月には井上ひさし作、蜷川幸雄演出の「ムサシ」がドゥサンアートセンターで上演され、大入りとなった。8月には宮本亜門のミュージカル「スウィーニー・



大勢の来場者で賑わう大邱美術館の草間彌生展

トッド」が忠武アートホールで、9月には野田秀樹の「半神」が明洞芸術劇場で、上演される予定である。

さまざまなネットワークを通じ、日本関連の大型企画が韓国で実施され、それを楽しむ観客層が生まれている。

- 2013年10月、ソウルのドゥサンアートセンターで、「カモメ」というタイトルの芝居が上演された。チューホフの「カモメ」の舞台を1930年の朝鮮半島に置き換えた翻案で、日本人若手演出家、多田淳之介の演出、韓国人の若手劇作家、成著雄の脚本による作品である。日本人と韓国人の俳優が、植民地時代を舞台に日本語と韓国語で演じるもので、難しい状況設定であったが、韓国の演劇界は冷静に受け止め、最終的に2013年度の東亜演劇賞を受賞した。
- 2014年2月に、明洞芸術劇場で、第6回現代日本戯曲ドラマリーディングが行われた。今回、紹介されたのは、日本で活躍している劇作家の本谷有希子、前田司郎、佃典彦の3氏の作品で、毎回多くの観客が訪れた。このイベントは毎年、日本と韓国で交互に開催され、これまでそれぞれの国で6回ずつ、12年間継続されている。ドラマリーディングと合わせ、翻訳した脚本が書籍として出版され、そこから実際に上演されるものも出てきている。両国の演劇関係者の地道だが、価値ある努力の積み重ねの成果と言えよう。
- 2012年に韓国国内で翻訳出版された日本文学は781点。村上春樹、東野圭吾、伊坂幸太郎から、三浦しをん、朝井リョウまで、ソウルの書店には日本文学専門のコーナーがあり、人気の本が平積みされている。東野圭吾の新作「疾風ロンド」が、今年1月に韓国国内で出版されるなど、有名作家の新作の中には、ほとんど日本とタイムラグなしに翻訳されるものもある。

## 地域レベルでの共通課題への取り組み

国際交流基金は、文化芸術、日本語教育、日本研究・知的交流の各分野で総合的な文化交流事業を展開しているが、韓国については、日韓文化交流5カ年計画（2011～2015年度）を策定し、「共通課題克服に向けた取り組みへの支援強化」、「若い世

代がより深いパートナーシップを育むための事業の推進」、「地域バランスに配慮した交流事業の展開」などに重点を置いて活動を行っている。キーワードは、「共通課題」「若者」「地方」である。日韓の社会、経済状況の近似性から、両国が抱える社会的課題も似通ったものになってきており、いわゆる狭義の文化芸術交流から、共通課題解決のための相互交流が意味を持つものになってきている。近年、国際交流基金は、日本あるいは韓国の地方自治体や地方の文化機関と連携した事業もいくつか実施している。

### <事例1>

2013年10月に韓国の安山市において開催された「日韓欧多文化共生都市シンポジウム」には、国際交流基金も、全国多文化都市協議会（韓国）、安山市、ヨーロッパ評議会とともに共催という形で関わった。韓国でも結婚や就労という形で長期間滞在する外国人の数は、90年代から増加の一途をたどり、現在では、総人口の約2.5%、およそ130万人に達し、多文化共生が重要な社会的テーマの一つになっている。日本では、外国人に対する社会政策は1990年代から地方自治体がリードしてきたが、韓国は、2004年以降、中央政府が短期間で法律を整備し、中央主権的に実施してきたという経緯がある。日韓のやり方は、一長一短があり、それだからこそ相互の経験から学び合うものが多い。残念ながらシンポジウムの直前に日本を大型の台風が襲ったため、参加できなくなった人もいたが、日本からは鈴木康友浜松市長をはじめとして多くの自治体関係者が出席し、韓国、ヨーロッパのカウンターパートと親交を深めた。



安山市で開催された日韓欧多文化共生都市シンポジウム

＜事例2＞

韓国の財団法人希望製作所<sup>ワンジュ</sup>と完州郡は、2008年から毎年、「日韓コミュニティー・ビジネス・フォーラム」を開催しており、国際交流基金もここ数年、助成という形で関わっている。毎回、地域活性化、エネルギー、高齢化社会など日韓両国が直面しているひとつの課題をテーマに据え、両国の自治体関係者や市民セクターの代表が参加して討議を行う。この事業を推進しているのが、完州郡<sup>イムジョン</sup>の林呈燁<sup>ヨブ</sup>郡守（郡の首長）である。林郡守は、現在、ソウル市長をつとめている朴元淳<sup>パクウォンスン</sup>氏が希望製作所に関わっている時に呼びかけた自治体首長の海外視察プログラムに参加して2007年に日本のコミュニティー・ビジネスの現場を視察し、地域活性化のためにコミュニティー・ビジネスを完州郡に導入することを決めたという。以来、完州郡の公務員や住民リーダーを毎年日本に派遣する研修を行っている。

＜事例3＞

文化芸術分野では、2013年に、国際交流基金は青森県立美術館と共同で、日中韓コラボレーション演劇「祝/言」の制作を行った。脚本と演出は、弘前劇場の主宰者であり、現在、青森県立美術館

の舞台芸術総監督である長谷川孝治氏。東日本大震災に題材を取った作品で、東北地方の演劇人のほか、韓国、中国からもアーティストが多数参加した。日本の東北地方を襲った大震災を、真正面からとりあげた作品であり、東北の演劇人の苦しみと再生に向けた熱い思いが込められている。さらに、韓国、中国のアーティストの参加により、地域や民族、国境、言葉の違いを超え、より根源的な問いを投げかけるものとなった。この作品は、2013年10月から2014年1月にかけて、日本、中国、韓国3か国の合計8都市で上演された。韓国では、ソウルのほかに、大田<sup>テジョン</sup>と全州<sup>チョンジュ</sup>の劇場で上演され、芸術を通じた地域間交流が実現した。

事例3の詳細については、自治体の取組事例として3-1（9ページ～）でも紹介しています。

交流のパイプを増やすことが重要

文化交流で日本と韓国の間横たわるすべての問題を解決に導くことができると考えるのは楽観的に過ぎるが、それでも文化を通じた交流は両国の関係の基盤を作る重要な要素の一つである。文化領域における日韓関係は、政治外交面での緊張感とは別に、年々静かに深化を続けている。文化コンテンツに関する関心を、より深い相手国理解につなげ、さらには共通課題への取り組みまでも含む広い意味での相互交流に発展させていくことは、両国の社会、文化、そして経済にとってもプラスになることであろう。そのためには、さまざまな交流のパイプを増やしていくことが重要であり、今後、日本の各地域の自治体、市民が文化交流の場において果たす役割もより大きなものになっていくと考えられる。

※言論NPOとEAIの調査は19歳以上を対象とし、2013年3月～4月に実施されたものであり、静岡県立大学グローバル・スタディーズ研究センターの調査は、プログラム参加者と同年代の15歳から29歳を対象として2011年10月～11月に実施されたものである。

※言論NPOとEAIの調査についてはHPを参照。http://www.genron-npo.net/world/genre/cat212/post-229.html

※静岡県立大学グローバル・スタディーズ研究センターの調査については以下に基づく。

渡邊聡ほか「日韓交流プログラムに参加した若年韓国人の対日認識とその考察—JENESYSプログラム参加者と非参加者への意識調査から—」、ソウル大学校日本研究所・韓日親善協会編『韓日間草の根交流と国際親善』（J&C、2013年）



日中韓共同制作演劇「祝/言」公演チラシ

## 2

# 韓国最大規模の日韓草の根交流イベント 「日韓交流おまつり」

## 2-1 日韓草の根交流イベント「日韓交流おまつり」

「日韓交流おまつり」実行委員（SJC元理事長・韓国富士ゼロックス元会長）高杉 暢也

昨年、日本では安倍政権、韓国では朴政権<sup>パク</sup>が誕生し新しい芽生えが期待された。しかし、残念ながら政治・外交関係は相変わらずぎくしゃくしたままの状況が続いた。そんな中、9月15日にソウルCOEX展示場で第9回「日韓交流おまつり」を開催し、4万5,000人もの両国市民が「おまつり」を楽しんだのである。最後のフィナーレでは甲斐・風林火山→沖縄エイサー→躍動→阿波おどり→よさこいアリラン→サムルノリと舞踊のリレー公演が続き、会場狭しとまさにビビン（混ざった）状態のおまつり交流の輪（和）ができたのだ。交流の歓喜は会場いっぱい響き、両国の老若男女があたかも桜花<sup>びくげ</sup>と無窮花<sup>むきゅうげ</sup>が咲き競うように踊り続けていたのである。



よさこいアリランで会場が1つになる

### 「日韓友情年」にはじまった「日韓交流おまつり」

この「おまつり」は2005年にスタートした。この年は日韓外交正常化40周年を記念する「日韓友情年」で「おまつり」はその記念行事の一環として行われたのである。韓国人は日本の祭りというものをほとんど知らない状態だったので、どんなものにも興味を持ってもらえるのかまったくの手探り状態で準備を進めた。加えて、竹島や教科書問題などで日韓関係が政治的に揺らいだこともあって、「本当に大丈夫なのか」という心配も聞こえてきた。ところが、心配をよそに晴天に

恵まれた当日は会場の大<sup>テ</sup>学路に5万人に及ぶ観衆が集まり日韓のお祭りを楽しんだのだ。特に最後の「日韓提灯フェスティバル」では、日本の「秋田竿灯」、「山鹿灯籠踊り」、「青森ねぶた」そして韓国の「能仁禅院釈迦像」がパレードすると大学路は大歓声に包まれたのだ。



2005年のねぶたパレード

これに気をよくしたSeoul Japan Club (SJC) メンバーはこの「おまつり」を毎年続けたいと願った。しかし、2005年は記念の年であるから両政府からすべての援助があったのである。今後これをやるとしたら資金集めをどうするのか、足が出たときはいったい誰が責任を取るのか心配が先立ち誰もが尻込みした。しかし、そんなときに、韓国研究・哲学者である小倉紀蔵氏から、「『韓流』や『ルックコリア』を通じて両国はインタラクティブな（相互作用する）関係を構築する時代になった。そして今や、両国は『イデオロギーの日韓関係』や『反発感情の日韓関係』ではなく、『クリエイティビティの日韓関係』に転換する絶好のチャンスを迎えたのだ」という言葉が届いたのである。

この言葉に刺激され、清水の舞台から飛び降りる勢いで、2006年も同じ大学路で「日韓交流おまつり」を開くことにした。「おまつり」は前年よりも小規模になったものの、またも見物人が喜んでくれて評判になり、今度はそれだけでなく潘基文<sup>パンギムン</sup> 外交交通商部長官（現在の国連事務総長）から、「韓国側も日本で同様の行事を開催したい」との表明があった。こうなれば、2007年も当然、ということになり、もはや誰も尻込みをしなくなった。そして、ソウルのど真ん中の市庁前広場と清<sup>チヨン</sup>溪川<sup>ググン</sup>で開くということで、ソウル市が合意してくれたのだ。ソウル市庁前広場はとりわけ象徴的な場所であ

る。今でも植民地時代に建てられたソウル市庁舎があり、かつてはそこから北にまっすぐ行けば朝鮮総督府があったところなのだ。そこで「日韓交流おまつり」をするとなると、なにが起こるか全くの未知数だった。だから、日本在住の関係者からは、「ソウルのだ真ん中で日本の祭りを演じるのはリスクが高い、危なすぎる、やめた方がよい」という意見が強く、随分、説得された。しかし、メンバーの気持ちは変わらず心機一転、新しい祭りを作る意気込みで韓国語の「混ぜること」、すなわち「ビビンバ」をコンセプトにして、この年の記念行事「朝鮮通信使400周年記念」もプログラムに取り込んで開催を実現した。

### 「おまつり」の移り変わり

その後、「おまつり」は継続して開催している。各年度のポイントを特筆してみたい。

2008年は領土問題、靖国問題で開催が危ぶまれたが、「こんな時だからこそやるべきだ」という関係者の強い声援に後押しされ開催した。

2009年からは東京でも開催の運びとなり潘基文外交通商部長官の思いが実現し、今では両国の同時開催となっている。

2010年は韓国併合から100年という年であった。テーマを「悠久の歴史、輝く未来」と決め、「悠久の歴史」の体現として宮崎県美郷町南郷地方で1300年間に渡って百済の魂を受け継ぐ「師走祭り」をソウルに招聘、韓国側も1300年ぶりの帰郷を「マジとプリハダ（歓迎と和解）」で迎えるという趣向をこらした演出プログラムで成功裏に再現できた。同時に朝鮮通信使時代に日本に伝えられ、今も岡山の牛窓町で伝承される「唐子踊」も出演した。

2011年は3月11日の東日本大震災により「おまつり」の中止も考えられたが、多くの方々から「規模は小さくともやるべし」の声援が寄せられた。そして、この大震災に対して韓国がいち早く救助隊や救療物資、義捐金などの温かい手を差し伸べてくれたのである。このような状況を鑑み、「ありがとう韓国、頑張ろう日本」をテーマに掲げ開催した。



日本の伝統文化を体験する子どもたち

2012年はソウル市の規制強化によりソウル市庁前広場が使えなくなり、会場をCOEX展示場に移した。「お祭りは外でやるもの」という固定概念から反対もあったが、天候の心配がいないなどの利点もあり実施に踏み切り、成功裏に終わることができた。

### 「おまつり」を成功させる「鍵」

「日韓交流おまつり」の特徴は国同士の交流のみならず、地方自治体、青少年など幅広い層での交流から成り立っていることである。そして、この「おまつり」を成功させる鍵には①資金、②ボランティア活動（ノウハウ）、③心の3つがある。「おまつり」は事業であるからやはり資金の裏付けがないと開催できない。従って、SJCメンバー企業や韓国側企業に協賛の理解と支援をお願いしている。両国政府主導で始まったこの「おまつり」は、いまや両国のボランティア老若男女がひざを突き合わせ、口角泡を飛ばして議論し作り上げる「手作りのおまつり」となっている。このプロセスが積み重なりノウハウとなって蓄積されてきている。さらに、日本において「不易流行」で表される、変えてよいものは変える、変えてはいけないものは変えないという強い心と、韓国において「易地思之」で表される、相手の立場に立って物ごとを思い判断するという思いやりの心を持って、この「おまつり」を継続している。世界のグローバル化、ボーダレス化が加速している中、日韓両国は民主主義、市場経済主義、類似の文化を共有するパートナーである。2011年の大震災時に示された温かい友情はまさにその象徴なのだ。



祥明大学ハンホルム舞踊団



阿波おどり

### 100年先を見据えて

10回目を迎える今年のテーマは「おまつり10年、夢のせて」と決めた。両国の間にどんな悪天候があっても常に進むべき方向を教えてくれる灯台の光のような日韓友好のシンボルとして、これから100年先を見据え両国の若者に引き継いでいきたいと願う素直な気持ちと夢を込めて、今、準備を進めているところである。

## 2-2 日韓交流おまつり2013 in Seoul における自治体の取り組み

(一財)自治体国際化協会ソウル事務所所長補佐 古殿 誠 (鹿児島県派遣)

日韓関係は時に良好で、時に厳しい局面を迎えることもある。そのような中、韓国を愛する日本人と日本を愛する韓国人が、このおまつりを日韓の友好親善を象徴する北極星のような存在にしていきたいとの思いで、市民ボランティアとして活動を行っており、この趣旨に賛同する日韓の自治体をはじめ、企業やボランティアの積極的な参加によっておまつりが成り立っている。まさに日韓草の根交流を象徴する一大イベントである。

### 自治体も文化交流に大いに貢献

2013年の日韓交流おまつり in Seoul には、約4万5,000人の市民が参加した。会場内では日本の自治体

#### ●自治体ブース出展実績 (2013年)

No.	ブース(団体)名
1	観光庁/日本政府観光局(JNTO)
2	ヒーリング〜三重県
3	山梨県・甲斐◇風林火山
4	青森県
5	長崎県
6	(一般財団法人)日本自治体国際化協会ソウル事務所
7	岡山県
8	(公益社団法人)新潟県観光協会
9	九州観光推進機構
10	鳥取県
11	(一般財団法人)沖縄観光コンベンションビューロー・沖縄市 山里青年会

※No.はブース番号順

も数多くブースを出展して、会場を訪れた多くの市民とふれあいながら、日本文化の理解醸成を図っている姿が見られた。

このおまつりは、日本と韓国に限定した文化交流イベントであり、言うまでも

なく、会場には日本に関心が高い市民が大勢詰めかける。出展する自治体は、伝統芸能の出演団体と協力して、観光地の紹介や特産品のPRを行い、おまつりを盛り上げる。また、来場者の日本をもっと感じたい、知りたいという熱意も伝わってくることから、自然にブースも盛況となる。

このように、自治体に参加することによって、地域の特色を生かした文化交流が生まれ、さらには経済振興にも結び付く。こうした取り組みは今後ますます重要性を増してくるものと思われる。



日本の自治体ブースを訪れる来訪者

#### 【参考】

- ・日韓交流おまつりHP  
<http://www.omatsuri.kr/japan/index.asp>
- ・CLAIRメールマガジン  
[http://www.clair.or.jp/j/forum/c\\_mailmagazine/201311\\_2/3-1.pdf](http://www.clair.or.jp/j/forum/c_mailmagazine/201311_2/3-1.pdf)
- ・資料：日韓交流おまつり2013事業報告書

#### ●日韓交流おまつり 2013 in Seoul プログラム

区分	番号	国	内容	出演団体
式典	1	韓国	Pops Orchestra	Rinnai Pops Orchestra
オープニング公演	2	日本・韓国	オープニング公演	日韓合同プロジェクトチーム オカリナ Unit EAST
1部 公式イベント	3	韓国	祝賀公演	ACTION DRAWING HERO
2部 公演	4	日本	沖縄エイサー	沖縄市 山里青年会
	5	韓国	TAEKWONDOSHOW	LEGEND MOVEMENT
	6	日本	雅楽	皇學館大学 雅楽部
	7	日本	甲斐 風林火山	甲斐◇風林火山
	8	日本	スペシャルゲスト	三吉彩花・三浦春馬 トークショー
	9	韓国	サムルノリ	キム・ドクス サムルノリベ
	10	日本	和太鼓	和太鼓・明日香
	11	日本・韓国	サムルノリ+和太鼓 日韓合同公演	キム・ドクス サムルノリベ+和太鼓 明日香
	12	日本	石見神楽	浜田石見神楽社中連絡協議会
	13	韓国	フュージョン韓国音楽 & Popera	WE PROJECT & ヘイン
3部 公演	14	日本	阿波おどり	阿波おどり振興協会
	15	韓国	エコミュージック	noridan
	16	韓国	韓国舞踊	祥明大学 ハンオルム舞踊団
	17	日本	躍動	躍動
	18	日本・韓国	躍動+韓国舞踊 日韓合同公演	躍動+祥明大学 ハンオルム舞踊団
	19	日本	J-POP	Hemenway
20	韓国	K-POP	GLAM/2AM	
21	日本・韓国	よさこいアリラン	よさこいアリラン	
22	日本	弘前ねぶた	弘前ねぶた	
23	日本・韓国	フィナーレ		

## 3

## 自治体の取組事例

## 3-1 日中韓国際共同制作演劇『祝/言』

青森県立美術館舞台芸術総監督 長谷川 孝治

2011年6月上旬。別件で尋ねた国際交流基金東京事務所。わたしはアジア・太平洋州長の方と向かい合っていた。

「長谷川さん、東日本大震災と中国、韓国、日本と絡めて演劇が作れないですかね」

わたしの中でそれまで針金ほどのものだった筋書きに、その瞬間急速に肉付けがなされていった。



演出している長谷川孝治監督

話は少し遡る。2011年4月29日。青森県立美術館舞台芸術企画課は、東日本大震災で被災され青森県内に避難されていた方々をご招待して太宰治原作「津軽」を野外特設ステージで上演していた。

太宰の小説「津軽」は故郷再訪がテーマである。故郷を一瞬のうちに亡くされた方々を前にして、故郷は自分をいつでも待っているという太宰の語りを聞いていただくのはどうかという議論もあったが、フィクションが持っている「事実」よりも「真実」を描くという特性を思い出して、上演に踏み切っていた。そして、被災された方々を率いて会場に来ていた、あるお寺の住職さんによる次の話が耳に入った。

「わたしね、ある人にこう相談されたんですよ……私は津波から車を運転して逃げた。でもその

時、前を走っていた人をたぶん轢き殺して逃げて助かった。住職さん、こんな私は生きていいんでしょうか？」

私事にわたって恐縮だが、東日本大震災が起こるまで、わたしは30年にわたって戯曲や小説を書いてきていた。しかし、震災後の津波が多くの方々を海へさらってから、一行も書くことができなかった。

つまり、それまで書いてきたすべてのことを「津波」が否定してしまったのである。すなわち、オマエの書いてきたフィクションは何の役にも立たないのだぞ。オマエの言葉は無力なんだぞ。

しかし、住職さんの言葉は、芸術か宗教でしか救えない魂もあることを伝えていた。金銭や施しでは救えない、人として生きていくプライドがあるということ。

青森県立美術館舞台芸術企画課は、2006年の美術館開館直前から韓国との演劇交流を進めていた。

ソウルの劇団コロモツキルとその主宰者である朴根亨パクグニョンと共に、「ソウルの雨」（作・演出＝長谷川孝治。公演場所＝ソウル、県立美術館）「青森の雨」（作・演出＝朴根亨。公演場所＝ソウル、県立美術館、東京）という作品を創り、ソウルと青森の俳優のコラボレーション、字幕の効果的な使用方法、演劇全体のコーディネーションを翻訳者と共に行うこと等々。およそ舞台制作に関するスキルは獲得できていた。

また、わたしが個人的に属していた劇団弘前劇場は、国際交流基金の助成で1996年にタイ・フィリピンとの国際共同制作「インディアン・サマー」を弘前と東京ですでに上演していた。

2011年8月、作品タイトルを『祝/言』としてシノプシス（粗筋）と企画書を書き上げ国際交流





震災の数少ない生存者となる中国人の大学教授（李丹）

基金に提出するとともに、青森県の重点政策予算にエントリーすることとした。

シノプシスを簡単に紹介しておく。舞台は東北地方の太平洋沿岸にあるホテルのロビー。大学院に籍を置く日本人花婿と韓国人花嫁、それに大学院で表象文化論を講じている中国人女性教授、さらには花婿と花嫁の親戚たちや大学の同僚たちが、翌日に控えた結婚式の打ち合わせのために集ってきている。

韓国の伝統音楽、津軽三味線、結婚式の余興を受け持つミュージシャンたちも揃い、さて明日の結婚式をどう進めようかという話が始まろうとしたその時、2011年3月11日金曜日、ホテルを大地震と津波が襲い中国人教授と福島県出身の大学院生の2人を残して全員が大災害の犠牲者となる。

日中韓3国はそれぞれ「喪の主体」となり「弔いを共有」できるかというテーマが設定された。

そして、中国人、韓国人、日本人からそれぞれ「中国」「韓国」「日本」を取り去り、残った人と人と人の交流を描くというサブテーマも付け加えられた。

国際交流基金はそれまで日本文化を海外へ紹介する際、助成とスタッフワークを主にしてきていたが、演劇制作にも直接的に関わることは初めてのことだった。

そして、国際交流基金のもうひとつの考えは、地域からの日本文化の発信というものだった。それまで東京でユニットを拵え、世界に日本文化の発信をしてきたが、東京ばかりが日本文化を創っているのではない。地域にも日本の文化はあるのだという意志を示すものだった。



日本人の花婿（左：相澤一成）と韓国人の花嫁（右：<sup>キムソナ</sup>金善花）

それは、ソウル、北京にとどまらず韓国の地域、中国の地域も巻き込んで舞台を創っていくことを意味した。

青森県の重点政策予算は2年間の継続予算である。中国、韓国は地理的に近いが心理的には遠い状況にあったが、青森県は積極的に韓国、中国との文化交流を進めていこうという決断をした。

まず1年目の2012年度。韓国、中国、東北地方の演劇調査と写真撮影が行われた。この調査の中には劇場視察、各フェスティバル調査、俳優・ダンサー・ミュージシャンのオーディションも含まれた。

写真撮影は韓国人、日本人、中国人がどのような風景を見て育ってきたのか、やがて一緒の風景をどう見たのか、さらに大震災後の宮城県閉上の風景を収めたロードムービー風の写真となって、『祝/言』というタイトルで写真集として出版され、



出版され、劇中でも使用された『祝/言』写真集

劇中でも使用された。カメラマンとして日本から鈴木理策、韓国から金志妍キムジヨンが参加した。

基本的に日本国内に関しては青森県立美術館、海外に関しては国際交流基金がコーディネートすることとし、日程が組まれ事業が開始された。

その間、尖閣諸島問題、従軍慰安婦問題、中国の防空識別圏設定問題、靖国神社参拝問題という国家間のさまざまな問題があったが、アーティストの共に作品を創ろうという意志は揺らがなかった。

まず、公演場所は青森、仙台、東京、ソウル、大田、全州、北京、上海の8都市、通算23ステージに決定し、大田は大田グランドフェスティバル、ソウルはソウル国際公演芸術祭、上海は上海インターナショナルコンテンポラリーシアターフェスティバル、東京はフェスティバル・トーキョーに参加することになった。



韓国人ダンサーと中国人ダンサーによるダンスシーン

参加アーティストは中国からダンサー1人、俳優2人。韓国からミュージシャン5人、俳優2人、ダンサー1人。日本からの参加者は青森から津軽三味線奏者1人、日本舞踊家1人、俳優3人、宮城県から俳優2人、福島県から俳優1人が参加した。

これに国際交流基金のスタッフ、通訳、照明家、音響スタッフを加えると総勢30人がツアーに参加することになった。

国際交流事業に不可欠なのは、参加者の間に、それぞれへの「リスペクト」があるかどうかである。それは国に対するもの、個人に関するものの2つが含まれる。

共同制作である以上、単に各国の文化を紹介する場ではあり得ない。生身の身体を使って表現する舞台芸術である。時に感情的にぶつかり、時に

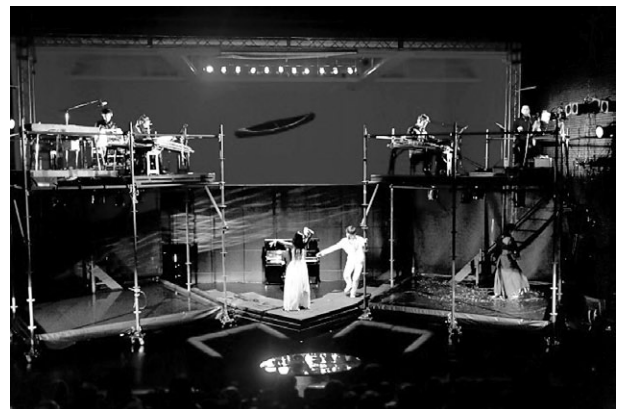
表現的にぶつかったりする。しかし、各自の根底に「リスペクト」があればそれらは乗り越えられる。事実、乗り越えることができた。

また、すべての舞台セットは各国の劇場スタッフに発注し、実際に劇場に入ってから日本人・中国人・韓国人スタッフの共同作業が行われた。舞台に関する考え方も時間の使い方もそれぞれ違った。

しかし、違うことを受け入れること、摺り合わせを行うこと、何より「その過程も交流なのだ」という意識を持つことが重要だった。舞台に登場してくるのは音楽、ダンス、俳優の演技、写真、そして字幕である。そのどれもが主ではなく従でもない関係を構築するために演出行為がなされた。

今回の事業で特筆されるべきは、政治的に戦後最悪とされる3国間で、文化交流という別なルートで「リスペクト」という目的を間にはさみ込んで日中韓およそ5,000人の観客の支持を得られたこと。地域がダイレクトに隣国と交流し合えたことだろう。

さらに今後、演劇のワークショップ、シンポジウム、さらには音楽での交流が計画されている。



舞台全体

最後に東京新国立劇場での公演を見た観客の感想を書きとどめておきたい。

「何よりも普段テレビジョンから流れてくる相手を非難する声ではなく、美しい言葉の響きを聞く機会をうれしく思う」。

## 3-2 日本の自治体との共同による日韓文化交流事業

韓国非営利民間団体韓日社会文化フォーラム代表理事 キム ヒョンジョン 金 賢廷

韓日社会文化フォーラム（以下、韓日フォーラム）は、韓国の外務省に登録された非営利民間団体で、日韓問題をめぐる正確な情報と多様な意見を自由に交換するための場として1999年に作られた団体である。韓日フォーラムは、日韓の多様なグループ間の対話を実現するため、日韓ジャーナリストフォーラムなど、各種のフォーラムを開催してきた。

その後、2006年には実質的な相互理解と交流事業を重点事業とするために組織を立て直し、日本の自治体と協力して日韓文化交流を行うようになった。



京都府綾部市観光協会との共同による日韓ワークキャンプ

2006年以降、北海道、秋田、富山、石川、宮城、福島、東京、茨城、静岡、京都、島根、熊本、福岡、宮崎、沖縄の各地域と大学生インターンシップ、ボランティア、ホームステイ、高校生交流、スポーツ交流、ワーキングホリデーなどの実施を通じて日韓文化交流を行っている。以下にその事例をいくつか紹介する。

### ①島根県との共同：日韓高校生のボランティア

2010年から毎年1回、真夏の1週間、韓国全国から集まった20人の高校生が島根の高校生たちと一緒に出雲海岸で漂着物回収ボランティアを行っている。（日本側のパートナー：島根県国際課および廃棄物対策課）。今年から、7月の実施に向

けて、希望者20人を3月中に選抜し、4月から6月までに毎月1回ずつワークショップを行うこととしている。ワークショップは「地球環境」・「ボランティア」・「国際交流」のテーマを掲げ、テーマごとにグループに分かれて学習（準備）し、島根でのボランティアプログラムの期間中に「日韓高校生フォーラム」を島根県と共同で行う予定である。

島根での体験を終えた韓国の高校生たちとホームステイ先の家族や海岸で一緒に汗を流した日本の友達は強い絆で結ばれる。韓国で島根関連のニュースが流れると島根で会ったホームステイ家庭のお母さんと出雲の友達を思い出し、中には2～3年間連続して参加する学生もいるほどである。

2012年からは島根の出雲西高校の学生たちが教諭と一緒に韓国を訪れ（5泊6日）、ボランティア体験とホームステイを実施している。ここに島根と韓国高校生の双方向の交流が実現した。



島根県との共同による日韓青少年ボランティア

### ②秋田県大仙市との共同：被災地でのボランティア

2011年3月11日に発生した東日本大震災の際に、韓国でボランティアを募集したところ、わずか1週間で志願者が500人を超えた。当時、ソウルの光化門での全体集会では「なぜ早く被災地へ行かないのか」と参加者から韓日フォーラムが糾弾されるほどの熱意だった。ボランティア500人を受け入れる日本の自治体と救済団体を見つけ出

すことに時間を要する中、3月末に、日本の歴史教科書改訂について、韓国内で大きく報じられると、ボランティアの希望者数が10分の1まで減った。そのようなアクシデントに見舞われながら、宮城県でボランティアをしている日本の救援団体キャンプともつながり、活動が続けられるようになった。その後、秋田県大仙市の絶大な協力によりボランティア50人を5回にわたって派遣することができた。

これがきっかけとなり、2012年、宮城県の被災地ボランティアの際は秋田県の竿灯まつりを見学・体験、2013年の10月には秋田県内の着物着付けボランティア団体がソウルの明洞を訪れ、着物試着を希望する韓国大学生たちに日本の伝統着物の着付けを教えて一緒に明洞の街を歩くというイベントを実施した。今年、2月に韓国大学生ら10人が大仙市の冬祭り「刈和野の大綱引き」などに参加し、6月には「秋田国際ボランティアの会」という大仙市の団体がソウルを訪れて、韓国の学生たちと一緒に汽車旅行とボランティアを行う予定である。



秋田県大仙市との共同による被災地ボランティア

### ③熊本県・熊本市国際交流振興事業団との共同： 韓国大学生のインターンシップ

韓日フォーラムでは2005年から、日本での職場体験を希望する韓国大学生を日本の自治体やNGO・NPOに紹介する事業を実施している。これは韓国教育部と大学が費用を全額支援して単位を認める16週間の無給インターンシップ事業の一環であり、2011年以降は熊本市国際交流振興事業団（KIF）をパートナーとして実施している。韓国大学生の満足度は驚くほどに高く、今年から、

インターンシップに参加する韓国大学生が「くまモンのモンバサダー」として熊本県営業部長の仕事を手伝う予定である。

ここで、熊本のラジオ放送局で職場体験をした女子大学生の感想を紹介する。

「日本人司会者が日本語で紹介するアリランの歌詞を私が一句ずつ韓国語で朗読した。日本語で聞くアリランの歌詞と韓国語で聞く歌詞は感じ方が違った。私は韓国語で朗読するうちに胸の奥で感情の高ぶりを覚え、涙が出そうになった。私が事前に勉強してきた内容を話すと、その司会者は日韓を比較しながら説明を加えてくれた。これこそ文化交流ではないかと思った。熊本の祭りでは、日本独特の踊りの動作ときれいな浴衣、夜に輝く灯、すべてが美しかった。互いの文化と歴史を理解するうえで有意義な時間だった。（中略）

今回のインターンシップがなければ学べなかったことをたくさん学んだ。また日本人の友達と付き合いながら世の中を見る目が広がった。私に夢と勇気を与えてくれ、思いやりとかけがえのないものを教えてくれた16週間に感謝する。これ以上願いはありませんと言えるほど、出会いと経験の一つ一つがすべて大切に、次にまた日本に行けたら、『私、また戻ってきたよ!』と心の底から明るく日本を迎えることができるようになった（一部要約）。



熊本市国際交流振興事業団との共同によるインターンシップ

## 日本の自治体と共同して行う 日韓交流事業の提案

韓日フォーラムは今までの経験を踏まえて、今

後も以下のような日韓交流事業を日本の自治体の皆さまと共同で取り組んで行きたいと考えている。

### ①インターンシップ受け入れによる国際交流の拡大

韓国人大学生の日本へのインターンシップは、毎年5月初めまたは10月初めから16週間の日程で実施し、日本滞在中の費用（住居確保を含む）を韓国側が全額支援している。一定の日本語能力（中級：JLPT 3級以上）を有する韓国人大学生が、4週間の職務教育期間（日本語学習など）を経て、その後12週間の職場実習を行う。地域の小中学校を訪問したり自治体の観光情報を韓国に伝えるブログ活動を行ったりもしている。

ちなみに、日本人大学生の韓国インターンシップについても韓日フォーラムが窓口となり韓国内の自治体や大学、NGO団体などへの紹介をしている。

### ②ワーキングホリデー支援による日韓青年交流

1999年から実施しており、2011年以降、ビザの発行者数は1万人を超えている。これは日韓間の最大規模の若者交流であり、自発的な交流である。日韓の政府と自治体は、このワーキングホリデーをもっと有意義なものとして見直す必要があり、自治体とNGO・NPOに求められているのは、言語サポートと定着サポートである。

最近の傾向として、韓国人大学生がワーキングホリデーを活用して働く場所の都市化が進んでいる。以前は地方の温泉旅館などでの労働が多かったが、このことは、韓国人大学生にとってワーキングホリデーの目的が単なる就労ではなく、異文化体験の機会として認識され始め、日韓ワーキングホリデーの本来の趣旨に沿った活動が始まったことを意味している。

韓日フォーラムは東京と熊本で、ワーキングホリデーの支援体制を整えている。その支援体制とは、ボランティア日本語教室と定着サポートの提供である。今後、韓国人の大学生のワーキングホリデーは、大都会ばかりでなく、ボランティア日本語教室と定着サポートの提供に協力可能なNGO・NPOがある日本の地方都市へ広がっていくと思われる。

### ③アジア希望キャンプによる次世代の日韓青年交流

これは日韓という枠組みを超えてアジア諸国で日韓の青年がボランティアをしながら交流し相互理解をするというものである。来年2015年は日韓基本条約の50周年であり、相互理解と対話のために50年間も向かい合っていた日韓であるが、これからは日韓関係の次世代を担う青少年がアジアの貧困と災害の地域に希望を与えるボランティア活動を共同で行うというプログラムである。

韓日フォーラムは2011年、夏、宮城県の被災地で行った「日韓ボランティアフォーラム」に集まった日韓をはじめ、世界の青年たちと「災害を乗り越えて世界へ未来へ」というスローガンを掲げ、その後、2つのことを進めている。1つは、「ボランティアの世界地図」を製作すること。既に多くの日韓の青年が「ボランティア世界地図製作」のボランティアに参加している。2つ目は、国際ボランティア活動調整委員会（CCIVS）、サービス・シビル・インターナショナル（SCI）、国際文化青年交換連盟（ICYE）、そしてそのほかの多くの世界のボランティアネットワークの会員団体と連携して、開かれた国際交流とボランティア活動を広げて行くことである。韓日フォーラムが進めているアジア希望キャンプには既にアジア各国とヨーロッパ、北米の国々が参加している。今後は日本の自治体とNGO・NPOとも連携して、このアジア希望キャンプの輪をさらに広げていきたい。

アジア希望キャンプについてのホームページ  
<http://www.workcamp.asia>

このほか、韓日フォーラムでは小中学校の交流や日本とのネットワークを活用したホームステイのマッチング活動を通じた旅行客誘致などに取り組むこととしている。上記提案事業や当団体の詳しい取り組みについては、ホームページで紹介している。

韓日フォーラムのホームページ  
<http://www.kjforum.org>

## 3-3 鹿児島・全羅北道の文化芸術交流

### 鹿児島県県民生活局生活・文化課

鹿児島県は、日本本土の最南端に位置し、急速な成長を続ける中国をはじめとする、東アジアに近接するという地理的特性から、香港、シンガポール、韓国全羅北道、中国江蘇省などアジア各国・地域とのさまざまな交流を進めているところである。

人口規模や産業構造など、本県と類似点が多い韓国全羅北道とは、1989年10月に「友好協力の推進に関する共同宣言」に調印して以来、行政間交流をはじめ、青少年や女性団体による交流、文化交流など、活発な交流が展開されており、1999年3月には、県人会をはじめ、技術研修員・国際交流員経験者など鹿児島にゆかりのある方々や、鹿児島に強い関心を持つ方々から成る「全羅北道かごしまクラブ（会員数180人、2013年5月現在）」が設立され、人的ネットワーク形成の促進が図られている。

### 鹿児島・全羅北道文化芸術交流事業

文化芸術の交流については、国際性豊かな感性を備えた県民の育成と特色ある郷土発展に資することを目的として、1994年に「鹿児島・全羅北道文化芸術交流事業」がスタートし、鹿児島県から太鼓や島唄など、これまで8団体164人を派遣、全羅北道からは舞踊団や交響楽団など、8団体175人を受け入れている。

なお、交流の基本的事項については、2年ごとに相互の地で開催している「鹿児島県・全羅北道交流協議会」において、交流のサイクル、派遣（受け入れ）人数、費用区分など、次のとおり定めている。

#### （1）交流のサイクル

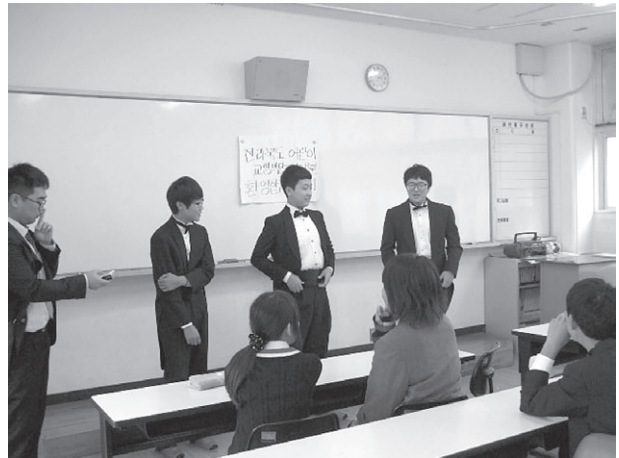
隔年度交互に文化芸術団体の派遣（受け入れ）を行う（2013年度は鹿児島県から全羅北道へ派遣、2015年度は全羅北道から受け入れ）。

#### （2）派遣団体・人数

青少年の文化芸術団体、20人程度とする。

#### （3）費用区分

渡航費を派遣側が負担し、交流に係る経費、相手国内での滞在費および交流事業に係る現地移動費用は受け入れ側の負担とする。



2011年鹿児島東高校での交流の様子

2011年からは、交流事業を行う対象団体を「青少年」とし、派遣（受け入れ）団体は、現地の文化芸術イベントへ出演するだけでなく、現地の学校などを訪問して、公演と交流活動を行うなど、お互いの文化を知ってもらう機会になるよう、計画して行っているところである。

最近の実績としては、2011年に韓国全羅北道から「全羅北道立オリニ交響楽団」20人を受け入れ、鹿児島県高校総合文化祭で演奏を披露したほか、県内の高校を訪問した際には、公演のあと韓国語を勉強している生徒たちと交流を行った。

また、2013年は、鹿児島県から枕崎市の中学生・高校生を中心とした和太鼓グループ「火の神乙女太鼓 爽」19人を派遣し、全羅北道を代表する国際的な音楽祭である「全州世界ソリ祝祭」で公演を行ったほか、「南原市立国楽院」を訪問して、お互いの演奏を披露するなど、交流活動を行った。

演奏前には、和太鼓の演奏に観客がどのような反応を示すのか不安であったが、いざ公演が始まると大きな歓声と拍手に包まれ、終演後に舞台裏まで来て、「すばらしい演奏だった」と団員に声を掛けてくれる観客も大勢おり、全羅北道での公



2013年全州世界ソリ祝祭で公演

演を通じて、国際性豊かな感性を磨くとともに、和太鼓というわが国、郷土の伝統楽器のすばらしさを再認識する機会となった。

### 霧島国際音楽祭における講習生受け入れ

さらに、1995年からは、音楽を通じて国際交流を図ることを目的として、夏の霧島で2週間にわたって行われる「霧島国際音楽祭」（鹿児島県、ジェスク音楽文化振興会、鹿児島県文化振興財団主催）において、国内外の著名な音楽家がレッスンを行う「マスタークラス」に県費負担で講習生1人を受け入れている。

これまでピアノやバイオリン、指揮など16人の講習生を受け入れており、風光明媚な霧島の自然と地元の方々による温かなおもてなしのもと、講習生は同じ目標を目指している仲間たちと交流を深め、密度の濃い充実した時間を過ごしている。

### これからの交流

鹿児島県では2015年の秋、国内最大の文化の祭典「第30回国民文化祭・かごしま2015」が開催されることとなっており、「本物。鹿児島県」の持つ多彩な魅力を生かしながら、おもてなしの心にあふれた鹿児島ならではの国民文化祭を目指し、準備を進めているところである。

2015年は、全羅北道から文化芸術団体を受け入れる年となっていることから、国民文化祭開催のタイミングを生かし、日本の文化を知っていただ

くとともに、本県と全羅北道の文化交流が図られればと考えている。

これからも国・言葉の壁を越えて共感できる文化芸術交流を継続し、本県と全羅北道の友好関係の維持に貢献していきたいと考えている。